

<研究報告>

教員養成段階の保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴 - e-Learning による体育模擬授業のリフレクション課題を通して -

浅井雅大 伊那市立高遠小学校
藤田育郎 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：相互作用行動，言葉かけ，模擬授業

1. はじめに

現行の小・中学校学習指導要領（文部科学省，2008）において，体育科・保健体育科における指導内容は，「技能」「態度」「知識，思考・判断」の3項目（体づくり運動では，「技能」が「運動」と表記，「知識」は中学校のみ）から構成されている。技能教科である体育授業においては，特に運動の「技能」の向上が児童・生徒の楽しさや喜びの源泉になりうると考えられる。

体育授業において教師に求められる能力の一つとして，子どもに対して有効な相互作用行動（言葉かけ）を営むことが挙げられる。高橋ほか（1991）や深見ほか（1997）は，体育授業における教師の効果的な相互作用行動を明らかにすることに試みたところ，肯定的フィードバック（賞賛），矯正的フィードバック（助言），励ましといった相互作用行動が子どもたちの授業評価と正の相関を有し，子どもたちから「役に立った」と認識されるものであることを明らかにしている。このような相互作用行動の中でも，子どもの運動技能の向上を促すためには，運動技能に関する矯正的かつ具体的なフィードバック（具体的情報を有した助言）が重要となると考えられるが，「生徒の動きを的確に変えるには，説明的な言葉での指導だけでは不十分で，生徒の感覚に訴える指示の言葉が必要」と小林（2000）が指摘するように，矯正的かつ具体的フィードバックの内容が子どもにとって感覚的に理解できるものであり，運動課題を解決するためのイメージを膨らませることができるものであるかどうか重要となる。

このような子どもの感覚に訴えかけたり，運動課題の解決に向けたイメージを膨らませたりする言葉は，しばしば「指導ことば」と表現され，すぐれた指導技術の一つとして挙げられる。例えば，マット運動において前転の指導を行う際に，「背中を丸めて回転してごらん」といった動きの改善を直接的に示した言葉よりも，「ダンゴムシのように丸まって転がるんだよ」という言葉によって，順次接触技術（後頭部から背中を経て臀部までを順番にマットに接触させる技術）を表現した方が子どもたちのイメージが膨らみ，運動技能の向上に有意に機能するといったようなことである。

実際の指導場面において，このような「指導ことば」を用いることに目を向けさせることは，教員養成段階の学生にとって大いに意義のあることだと考えられる。そこで本研究

では、「指導ことば」を用いることが可能な教科指導の力量形成を意図する教員養成カリキュラムの開発に向けた基礎的研究として、教員養成段階の保健体育専攻学生が考え得る「指導ことば」の特徴を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2.1 対象

2014年度にS大学教育学部で開講された中等体育科指導法演習（受講生：男子29名，女子8名，計37名，全員教育実習を経験済の3年次生）の授業において実施した8回の模擬授業を対象とし，受講生が毎回の模擬授業終了後に記入した振り返りシートにおける記述内容を分析した。なお，模擬授業で取り上げた具体的な内容は，表1に示したとおりである。

表1 模擬授業の内容

回	模擬授業の内容	
1	模擬授業①	A 多様な動きをつくる運動(投動作)
		B 多様な動きをつくる運動(捕球動作)
3	模擬授業②	A ハードル走(走から跳の組み合わせ)
		B ハードル走(跳から走の組み合わせ)
5	模擬授業③	A ベースボール型ゲーム(打撃動作①)
		B ベースボール型ゲーム(打撃動作②)
7	模擬授業④	A マット運動(伸膝前転)
		B マット運動(前方倒立回転跳び)

2.2 中等体育科指導法演習の概要

中等体育科指導法演習では，体育授業にかかわる実践的な指導力を育成することをねらいとして，実施した模擬授業を教師役，児童・生徒役，観察者役といった多角的な視点から振り返り，よりよい授業へ向けた授業改善の方略を検討することを主たる目的としている。また，受講生は，模擬授業実施後に筆者の内の1人が作成した「言葉かけチャレンジ映像」をe-Learning上で視聴し，授業外の時間を活用した振り返りシートの課題作成に取り組むこととしている。

2.3 「言葉かけチャレンジ映像」の概要

本研究で受講生に視聴させた「言葉かけチャレンジ映像」は，模擬授業の中で受講生が各種の運動に取り組んでいる場面を抽出したものである。運動技能に改善が必要であると思われる受講生が活動している場面を中心として抽出し，映像の中の受講生に対して運動技能の向上を促すオリジナルの言葉かけを考案し，振り返りシートにその内容を記述することを課題としている。なお，1回の模擬授業で8つの異なる場面を抽出し，それぞれについて考案したオリジナルの言葉かけを記述させている。

2.4 記述内容の分析手続き

小林(2000)によって示された「体育指導における感覚的指導の言葉のカテゴリー」(表2)を用いて，受講生が「言葉かけチャレンジ映像」を視聴して振り返りシートに記述した内容(考案した言葉かけ)を分類した。

例として，実際に受講生に「言葉かけチャレンジ映像」として視聴させた場面，それに対して受講生が考案したオリジナルの言葉かけとそのカテゴリー分類を図1に示した。この場面は，マット運動における前方倒立回転跳び(ハンドスプリング)の技に取り組んで

保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴

いるものの、運動技能に改善が必要であると考えられる学生を抽出したものである。考案された言葉かけにおいて強調されていると考えられる意味内容(下線部)から、最も該当すると考えられるカテゴリへと分類した。

表2 体育指導における感覚的指導の言葉のカテゴリ

① 意識を焦点化させる指示	
1) 初動時の動作	2) 終末時の動作
3) 動かしやすい末端の部位	4) 動かしたい部位のシンボル
5) 随伴現象を生み出す部位	6) 外部の対象
② 比喻によってイメージを育てる指示	
1) 動作のイメージ	2) 変身のイメージ
3) 「もの」を操作するイメージ	4) 「もの」のイメージ
③ 擬音語による指示	

このような言葉かけの内容を模擬授業①A～②Bの4回を前半、模擬授業③A～④Bの4回を後半として比較するとともに、各運動領域についてもその特徴を明らかにすることとした。なお、記述内容の分類は、客観性を確保するために筆者ら2名による合議の上で実施した。



「 <u>最初</u> に腕を大きく振り上げよう」	①意識を焦点化させる指示 2) 初動時の動作
「着地の時に天井を見てごらん」	①意識を焦点化させる指示 7) 外部の対象
「 <u>腕</u> でジャンプするイメージで押そう」	②比喻によってイメージを育てる指示 2) 動作のイメージ
「 <u>ギュー</u> ～じゃなくて <u>ギョッ</u> と突き放して」	③擬音語による指示
「もっと勢いよく回転してみよう」	分類なし(説明的な言葉)

図1 言葉かけのカテゴリ分類例

3. 結果と考察

表3は、振り返りシートに記述された内容(受講生が考案した言葉かけ)を該当するカテゴリに分類し、模擬授業①～④において各カテゴリに分類される記述が出現した場面数を集計したものである。表1に示したように、模擬授業①～④では、AとBの2回の模擬授業を実施し、それぞれ8つの場面を視聴させているので、表中の各カテゴリにおける最大値は16となる。

3.1 時間的経過に伴う言葉かけの変容

前半4回(多様な動きをつくる運動、ハードル走)と後半4回(ベースボール型、マット運動)における記述数を比較したところ、全体として量的な増加がみられた(前半:37, 後半:96)。また、同一のカテゴリ内において大きな増加がみられたものとしては、「①意識を焦点化させる指示」の「2) 終末時の動作」「3) 動かしやすい末端の部位」「5) 随伴現象を生み出す部位」「6) 外部の対象」, 「②比喻によってイメージを育てる指示」の「1)

動作のイメージ」, 「③擬音語による指示」であった。これらのことから, 実際の運動学習場面から抽出した映像を視聴して, オリジナルの言葉かけを考案するといった課題を繰り返し遂行することは, 子どもたちの運動技能の向上を促す「指導ことば」に対する視点を育むにあたって, 有効に機能していたものと考えられる。

表3 記述内容(言葉かけ)の分類結果

分類カテゴリー	模擬授業① 多様な動き	模擬授業② ハードル走	模擬授業③ ベースボール型	模擬授業④ マット運動
① 意識を焦点化させる指示				
1) 初動時の動作	0	0	2	0
2) 終末時の動作	1	0	0	9
3) 動かしやすい末端の部位	2	3	8	8
4) 動かしたい部位のシンボル	1	0	0	5
5) 随伴現象を生み出す部位	0	9	11	10
6) 外部の対象	1	0	7	3
② 比喩によってイメージを育てる指示				
1) 動作のイメージ	3	2	3	11
2) 変身のイメージ	1	5	0	0
3) 「もの」を操作するイメージ	1	0	2	0
4) 「もの」のイメージ	1	0	0	0
③ 擬音語による指示	7	0	12	5
前半・後半の合計	37		96	

※太線で囲った箇所は, 領域における最大値を示している。

3.2 運動領域別にみた言葉かけの特徴

続いて, 表2において分類された記述について, 運動領域別にみた際に多くの記述が出現していたカテゴリーを取り上げ, 考察を加えることとする。

(1) 多様な動きをつくる運動

模擬授業①では, 小学校低学年段階を想定した多様な動きをつくる運動として, 投動作と捕球動作に焦点を当てた模擬授業を実施した。最も多く出現したカテゴリーは, 「③擬音語による指示」であり, 視聴させた計16場面のうち7つの場面で出現した。

図2に示した「言葉かけチャレンジ映像」に対する具体的な記述内容としては, 「ボールを捕るときには, 腕も膝もフワッとやわらかく使えるといいね」といったものであった。ボールを捕球する際には, 飛来してくるボールと反発することなく, 手や腕を自分の体に引きつけるようにしたり, 膝を曲げたりすることによって, ボールの勢いを吸収する緩衝動作を生じさせることが課題の一つとなる。受講生は, 「フワッ」といった擬音語によって, その緩衝動作を表現しようとしていた。



図2 捕球動作の「言葉かけチャレンジ映像」

保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴

一方、投動作については、「投げる瞬間には手先（指先）をピッ（シュッ）と使おう」といった記述がみられた。ボールを投じる際には、主要局面であるボールのリリース時にスナップ動作を用いることが課題の一つとなるが、「ピッ」「シュッ」といった擬音語によって、スナップ動作による力感を表現しようとする特徴がみられた。松下・藤田（1998）は、この擬音語について、運動イメージを喚起させやすく、合目的な動作を習得させる際に、教師が意識的・無意識的によく使用しているものであるとしている。ボールを捕る際の緩衝動作や投げる際のスナップ動作といった、より合目的な動作の習得を擬音語によって促そうとする特徴がみられたと考えられる。

また、次に多く出現したカテゴリーは、「②比喻によってイメージを育てる指示」の「1）動作のイメージ」であり、視聴させた計 16 場面のうち 3 つの場面で出現した。ボールを捕る際の緩衝動作や投げる際のスナップ動作は、意識的に獲得していくことが難しいものであると考えられるが、比喻によってそのような動作のイメージを膨らませようとする傾向がみられたことも特徴的であったと思われる。

(2)ハードル走

模擬授業②では、中学校段階を想定したハードル走における走運動と跳運動の組み合わせに焦点を当てた模擬授業を実施した。領域内で最も多く出現したカテゴリーは、「①意識を焦点化させる指示」の「5）随伴現象を生み出す部位」であり、視聴させた計 16 場面のうち 9 つの場面で出現した。

ハードル走は、走る・跳ぶといった日常生活において既に習得している動きの達成度を高めていく学習であるとされる。クリアランス（ハードルを跳び越えていく局面）では、上体を前傾させた姿勢を取ること（ディップ動作）で重心の上下動を抑えることが課題の一つとなる。しかし、それはハードルを跳び越えるために働く鉛直方向の力と相反する力を加えるといった動作であるとともに、ハードルといった恐怖心の対象ともなり得る物的障害を克服しようとする瞬間に生じる動作でもある。よって、「上体」という大まかな身体的部位を取り上げて動きの改善を直接的に指示する言葉では、有益な効果がみられないことが想定される。

図 3 に示した「言葉かけチャレンジ映像」に対する具体的な記述内容としては、「右脚のつま先を反対側の手で触るようにしてごらん」「ハードルの上ではアゴを引いてみよう」といったものであり、つま先・手・あごといった身体的部位に意識を向けるようにしている。小林（2000）は、

この随伴現象について、「自分の意思で動かしやすい部位に意識焦点を置き、その部位の動きの随伴現象として、目指す部



図 3 ハードル走の「言葉かけチャレンジ映像」

位の動きを引き出そうとする」ことと述べている。つま先・手・あごといった体の末端に位置する部位は、比較的意識を向けやすい身体的部位であると考えられるが、振り上げた脚のつま先を反対側の手（踏み切った脚と同じ側の手）で触るような動作やあごを引く動作によって、ハードル上で上体を前傾させた姿勢を随伴的に引き出そうとする表現が特徴的であったと考えられる。

また、次に多く出現したカテゴリーは、「②比喻によってイメージを育てる指示」の「2) 変身のイメージ」であり、視聴させた計 16 場面のうち 5 つの場面で出現した。ここでみられた具体的な記述内容としては、「カエルのように脚を横に開いてみよう」といったものであり、クリアランスにおける抜き足の動きの改善を意図したものであった。先述したように、ハードル走は走る・跳ぶといった既習の動きで運動が構成されているものの、中学校学習指導要領解説（文部科学省，2008）に記載されているように「抜き足の膝を折りたたくで横に寝かせて前に運ぶ」といった新たな動きを獲得していく過程では、比喻によって動作のイメージを膨らませようとする傾向が考えられる。

(3) ベースボール型

模擬授業③では、中学校段階を想定したベースボール型の打撃動作に焦点を当てた模擬授業を実施した。領域内で最も多く出現したカテゴリーは、「③擬音語による指示」であり、視聴させた計 16 場面のうち 12 の場面で出現した。

打撃動作では、先に述べた投動作におけるリリース時のスナップ動作と同様に、主要局面であるバットとボールが接するインパクトの瞬間にいかにか強い力を発揮するかが課題の一つとなる。ここでみられた具体的な記述内容としては、「バットが当たる瞬間にグッと押し込んでみよう」「バットを強く振るために、前脚で体重をギュッと受け止めてごらん」といったものであり、意識が向けられている身体的部位に違いはあるものの、「グッ」「ギュッ」といった擬音語によって、インパクトの瞬間に向けた力感を表現しようとする特徴がみられた。

また、次に多く出現したカテゴリーは、「①意識を焦点化させる指示」の「5) 随伴現象を生み出す部位」であり、視聴させた計 16 場面のうち 11 の場面で出現した。図 4 に示した「言葉かけチャレンジ映像」に対する具体的な記述内容としては、「打ったところ（ミートポイント）に顔を残そう」といったものであった。打撃動作では、先に述べたインパクトの際の力感に加えて、インパクトポイントでバットを振り抜く感覚が重要となるといった指摘がみられる

（岩田，2012）。打ったところ（ミートポイント）に顔を残すといった動作によって、上体の開きを抑制することで、ヘッ



図 4 打撃動作の「言葉かけチャレンジ映像」

保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴

ドスピードを加速させて振り抜くようなスイングを随伴的に引き出そうとする意図を伺うことができる。

(4) マット運動

模擬授業④では、中学校段階を想定したマット運動の伸膝前転と前方倒立回転跳びを取り上げた模擬授業を実施した。領域内で最も多く出現したカテゴリーは、「②比喻によってイメージを育てる指示」の「1) 動作のイメージ」であり、視聴させた計 16 場面のうち 11 の場面で出現した。

マット運動における技の習得にあたって必要となる動きや感覚は、逆さまになったり、腕で体重を支持したりといったことに代表されるように、日常の生活で存在しないものが多い。そのような新たな動きを獲得・形成していくことに学習の難しさが存在するとされ、そのような動きと感覚的に類似した運動を予備的運動や下位教材として豊富に経験させていく必要があるとされる。

図 5 に示した「言葉かけチャレンジ映像」に対する具体的な記述内容としては、「立ち上がる時は輪っかをくぐるように（首に引っかけるように）してみよう」といったものであり、伸膝前転の立ち上がりの局面における上体の使い方に着目したものであった。その場には存在しない架空の輪（図 5 における白い輪）を想像させて、それを下からくぐる、あるいは首（の後ろの部分）に引っかけるといった動きをイメージさせることで、望ましい動きを引き出そうとする特徴がみられた。

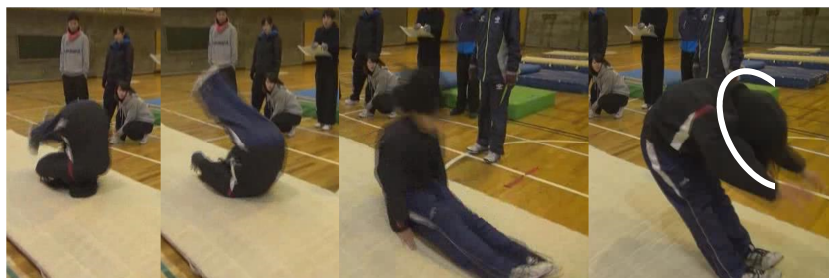


図 5 マット運動の「言葉かけチャレンジ映像」

一方、前方倒立回転跳びについては、「腕でジャンプするイメージでマットを押しごらん」といった記述がみられ、着手の局面における腕の押しによって回転後半の加速を得る動きを、脚でのジャンプに例えて動作のイメージを膨らませようとする意図を伺うことができる。マット運動のような新たな動きを獲得・形成していくタイプの運動では、先述したハードル走における抜き脚の使い方と同様に、比喻を用いた表現が特徴的であったと考えられる。

また、次に多く出現したカテゴリーは、「①意識を焦点化させる指示」の「5) 随伴現象を生み出す部位」であり、視聴させた計 16 場面のうち 10 の場面で出現した。ここでみられた具体的な記述内容としては、「着地のときにはアゴを上げてみよう」といったものであり、前方倒立回転跳びの着地姿勢の改善を意図したものであった。あごといった比較的意識を向けやすい身体的部位に着目させ、あごを上げる動作によって頭部を背屈させ、体を反らした着地姿勢を随伴的に引き出そうとする傾向が考えられる。

4. まとめ

本研究では、教員養成段階の保健体育専攻学生が考え得る「指導ことば」の特徴を明らかにすることを目的とした。

模擬授業において、運動技能に改善が必要であると思われる受講生が活動している場面を中心として抽出した「言葉かけチャレンジ映像」を視聴させ、運動技能の向上を促すオリジナルの言葉かけを考案させることを課題とし、時間的経過に伴う言葉かけの変容と運動領域別にみた言葉かけの特徴について考察を行ったところ、以下の5つの点について言及することができる。

- 1) 運動技能に改善を要する学生の映像を視聴して、言葉かけにチャレンジするといった課題を繰り返し遂行することは、「指導ことば」に対する視点を育むにあたって有効に機能していたものと考えられる。
- 2) 投動作・捕球動作・打撃動作のように、物や用具を扱うタイプの運動では、擬音語による「指導ことば」を用いる傾向がみられた。
- 3) ハードル走のように、走動作や跳動作といった動きの達成度を高めていくタイプの運動では、動きを随伴的に引き出す「指導ことば」を用いる傾向がみられた。
- 4) マット運動のように、新たな動きを獲得・形成するタイプの運動では、比喻によってイメージを引き出す「指導ことば」を用いる傾向がみられた。
- 5) 投動作におけるスナップ動作、打撃動作におけるインパクト動作、ハードル走におけるクリアランス動作といった運動観察の対象となりやすい主要局面を取り上げた「指導ことば」が多いという特徴がみられた。

なお、子どもの感覚に訴えかけたり、運動課題の解決に向けたイメージを膨らませたりする「指導ことば」を生み出すことは、運動経験や指導経験、運動の構造や感覚の理解の度合いに左右されると考えられる。したがって、そのような点を踏まえた分析・考察を行うことが、本研究に残された課題となるといえるであろう。

また、より有効な「指導ことば」を生み出すためには、指導法の探究や指導経験の充実を意図する教科教育法の授業科目と運動の構造や感覚の理解促進を意図する教科専門の授業科目、両者の授業科目間におけるより一層の授業内容の連関が求められるといえるであろう。

付記

- ・本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（課題番号：26560332）の助成を受けて行われたものの一部である。
- ・本研究は、平成26年度第4回日本科学教育学会研究会（北陸甲信越支部開催）における研究報告（藤田ほか、2015）を加筆・修正したものである

保健体育専攻学生が用いる「指導ことば」の特徴

【引用・参考文献】

- 藤田育郎・谷塚光典・結城匡啓・安達仁美・岩田靖・平野吉直（2015）教員養成段階の保健体育専攻学生が用いる指導ことばの特徴—e-Learning による模擬授業のリフレクション課題を通して—．日本科学教育学会研究会研究報告，29（4）：29-32.
- 深見英一郎・高橋健夫・日野克博・吉野聡（1997）体育授業における有効なフィードバック行動に関する検討：特に，子どもの受けとめかたや授業評価との関係を中心に．体育学研究 42（3）：167-179.
- 岩田靖（2012）体育における「教具」とは．体育科教育，60（6）：10-15.
- 木原資裕・曾我部敦介・草間益良夫（2000）剣道指導における言語表現の検討—擬音語を中心に—．武道学研究，33（別冊）：53.
- 小林篤（2000）体育の授業づくりと授業研究，150-180，大修館書店：東京.
- 松下健二・藤田定彦（1998）運動を指導する際の擬音語・擬態語に関する基礎的研究，兵庫教育大学教科教育学会紀要，11：11-30.
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説 体育編．東洋館出版社：東京.
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説 保健体育編．東山書房：京都.
- 高橋健夫・岡沢祥訓・中井隆司・芳本真（1991）体育授業における教師行動に関する研究：教師行動の構造と児童の授業評価との関係．体育学研究，36（3）：193-208.

(2015年12月 9日 受付)
(2016年 2月10日 受理)